
テイルズオブザワールド レディアントマイソロジー3 ～龍は閃光のように・・・～

颯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブザワールド レディアントマイソロジー3 龍は閃光のように・・・

【Nコード】

N9968Z

【作者名】

颯

【あらすじ】

世界中の守り手、‘ディセンダー’、太古より予言されていたそれは、世界を守護するために現れる・・・

「世界樹」とその「世界樹が生み出したとされる星晶」というエネルギー鉱物で発展を続ける世界、ルミナシア
しかし、星晶の力で産業が発展する国々がある一方で、それらの国から植民地化を強要されたり、恵みを奪われる国もありました・・・

空を駆ける船、バンエルティア号を拠点に活動するギルド「アドリビトム」の面々は、そういった恵みを奪われる人々を助けるために活動をしています。

ある日、アドリビトムに所属する少女カノンノは、空から落ちてきた主人公カイトと、光の中から現れたシュウ・・・彼等には自分の名前の記憶がなく、目的もわかりません。

行く当てのないかれらはカノンノに連れられ、アドリビトムに入ります。

新たなレディアントマイソロジーをお楽しみください。

プロローグ 始まり

????

『ゴオオオオアワアアアアッ!!!!』

4本の足に翼を生やした赤い竜の咆哮が……この場所に響き渡った……

たくましかった翼はボロボロでもう空も飛べない……角は半ばころから折れ、前両足と右後ろ足は爪が折れ、尻尾は切断されていて、もう戦えるような状態ではない……

????

「こんなものか……太古の世界……ルミナシア一の力をもったドラゴンといってもこの程度……」

その竜をこのような姿まで追い込んだ……いや、まるで玩具の様に遊んだ人……いや人ではない。体には水晶のようなものをたくさんつけ、髪の色は白く毛先だけが青い……左目は大きな貝で覆い尽くされ、右頭部には螺旋状に渦巻く貝がついている。

????

「とどめだ……世界創造のメルト!!」

彼を中心に花のような魔方陣のようなものが展開され炎、氷、雷等の連続の攻撃が竜を襲った……

『ガアアアアアアアアアアッ!!!!?』

竜は攻撃をたてつづけに受け、吹きとんだ。

そして壁であろう部分に叩きつけられ、その壁が破壊した……

どうやらこの場所は高いところにあるようだ……ピクリとも動かず海面へと落下していった。

???

「……仕留め損ねたか……まあいいだろう、この高さだ……海面にたたきつけられて死ぬだろう。」

そうして彼は闇へと消えていった……

プロローグ 落下

三人称side

カノンノ

「今日は世界樹がよく見えるね・・・」

ピンクの髪のかわいらしい少女がたずねる。

ロックス

「ええ。何かいいことがあるかもしれませんね。」

空を2枚の羽を器用に使って飛んでいる小さな生物が答えた。

カノンノ

「うん。」

ロックス

「ん？あれは・・・」

カノンノ

「どうしたの？ロックス」

ロックス

「いえ・・・あれはいい・・・」

ロックスが見ていたほうにカノンノは向くそのには・・・

???

「うわああああああ」

カノンノ

「ん？ってあれ人？」

ロックス

「こっちに落ちてきています！！」

カノンノ

「キャアアアア！！」

『ドスン……』

仰向けになって落ちてきたのは少年だった……まずはじめに目に入ったのは髪の色……まるです

べてを燃やすような……でもどこかに冷たさを覚える蒼い髪……

・服は黒いジーンパンに白のシャ

ツ、そのうえに赤と黒のチャックの服を羽織って、そのうえに黒のフード付のロングコートを着てい

た……そして背中には見たこともないような剣が提げられていた。

カノンノ

「……ロ、ロックス。急いで医務室に連れて行くよ。」

ロックス

「か、かしこまりました。」

数時間後

???

「・・・っう・・・くう。ウワアアアアアア!!」

カノンノ

「キャア!」

???

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・ここはどこだ?」

アニー

「あ、ようやく目が覚めたのね。ここは医務室ですよ・・・展望台で倒れていたあなたを見つけてここで治療していたの。」

???

「あ、ありがとう。」

アニー

「お礼なら今あなたの奇声に驚いたこの子に言ってちょうだい。倒れていたあなたをここまで運んでくれたの。」

???

「え? あ、ごめん。君が俺を?」

カノンノ

「うん。私の名前はカノンノ。カノンノ・グラスバレーよ。あなたは？」

カイト

「俺はカイト、カイト・バナージ。さっきはありがとうな。」

カノンノ

「ううん。気にしないで。」

そんな会話をしているとアニーが、

アニー

「あなた、すごい怪我をしていたのよ？しかも空から落ちてくるし・・・」

カイト

「空から？怪我・・・って本当だ。」

突然青い髪の女の人が入ってきた。

アンジュ

「あら？目が覚めたのね？私はアンジュ、この船のリーダーをしているわ。」

ロックス

「僕はこの船でコンシェルジュで、ロックスプリングスと申します。ロックスとお呼び下さい」

アニー

「あら。申し後れました。私は医務室でお手伝いさせていただきます」

ています、アニー・バースと申します。」

カイト

「俺はカイト・バナージだ。」

アンジュ

「ところであなた何者？空から落ちてきたってのも気になるし・・・」

カイト

「え？俺は・・・あれ、俺は・・・」

アンジュ

「?どうしたの。」

カノンノ

「もしかして記憶が・・・」

カイト

「ああ・・・みたいだ・・・何も思い出せない。」

アンジュ

「そう。なら仕方ないわね。記憶の無い状態でどこかの街に出したら、それこそ危険ですもの」

アンジュは少し考える仕草を見せると何か思い付いたようにカイトへと向いた。

アンジュ

「・・・そうね。なら、記憶が戻るまでこのギルドで働かない？

働いてさえくれれば、ちゃんと衣食住
ついた待遇をするわよ」

カイト

「ギルド？」

アンジュの言葉にここにいた全員が驚く。

アンジュ

「ええ。いろいろなギルドがあるけど、ここのギルドは、人を助けるのを目的としたギルドよ。」

カイト

「俺が・・・人を・・・助ける・・・・・・・・」

アンジュ

「そう。」

カイトが下を向いて考えているとカノンノが元気そうにカイトに迫ってきた。

カノンノ

「そうだよ。一緒に働かない？まあここに入るために入団テストみたいのものもあるけど、私も手伝うからさ。」

カイト

「カノンノさん・・・うん、わかった・・・アンジュさん。いますぐに試験をお願いします。」

アンジュ

「だめ。」

カイト

「うり？」

アンジュ

「あなたそんな体で試験受ける気？ 試験は後日よ。今日はゆつくりねむりなさい。」

カイト

「あ、はい。」

アンジュ

「それじゃあみんな、戻るわよ。」

そういいながら、アンジュを先頭にカノンノ以外は医務室を後にした。

そうしてカノンノはというと・・・

カノンノ

「ねえカイト君。見て欲しい物があるんだけど。」

カイト

「見て欲しいもの？」

カノンノ

「うん。これ・・・」

カノンノはおそらく自分が書いたであろう絵をカイトに見せてき

た。

カイト

「これ・・・どこかで・・・見たことがある。」

カノンノ

「え？」

カイト

「カノンノさん。これをどこで？」

カノンノはあわてた表情で答える。

カノンノ

「え？えっと・・・それは、た、たまに頭のなかにみたこともないような光景が広がって、その見えた風景を筆でなぞって、書いたのがこれらの絵なの・・・でもこれを見たことがあるって言う人はカイト君が初めて・・・」

そのカノンノの表情はどこかうれしそうなものがあつた。

カイト

「どうした？」

カノンノ

「え？・・・他の人にも見せたけど、誰もこの風景を知らないの。それに、作り話でしよって、笑われちゃうの・・・」

カイト

「・・・作り話じゃねえよ。」

カノンノ

「え？」

カイト

「絶対にこの場所見つけて、カノンノさんは嘘を言っていないって証明してやるよ・・・それにこれは見たことがある気がする。だから心配するな・・・」

カノンノ

「あ、ありがとう。カイト君。」

カイト

「あ、あと、カイト君じゃなくてカイトって呼んでくれないか？」

カノンノ

「え？ どうして？」

カイト

「ん？何でだろ・・・呼び捨てで呼ばれたいのかな・・・それとも記憶があつたころはカイトって呼ばれていたのかも。」

カノンノ

「・・・うん。わかった。その代わり私もカノンノって呼んで？」

カイト

「・・・わかった。あらためてよろしく。カノンノ。」

カノン

「うん。こちらこそ。カイト。」

いまここに、龍の騎士と光の騎士とカノンたちの物語が始まる。

第1話：試験

カイト side

アンジュ

「それでは・・・最終試験の内容を発表します。」

最終試験・・・このギルド。アドリビトムに入るためにやらなければならない最後の試験・・・これまで採掘、採取などの試験をやったが、魔物と出会う機会はなかった。つまり、普通に考えて最後の試験は討伐・・・記憶が戻るまでは知らないが、戦ったことがない。・・・大丈夫だろうか？

アンジュ

「ふふ。そんな顔をしなくても大丈夫よ。あなたなら出来るわ。カノンノを連れて行くしね。」

心読まれた！？いや、顔色で大体わかるのか？

アンジュ

「それではあらためて、ガルーダの討伐に行ってもらいます。」

カイト

「ガルーダ？」

カノンノ

「そう。1番はじめに倒す魔物だよ。空を飛ぶ、鷹みたいな魔物よ。」

カイト

「うお！？カノンノ？ビックリした・・・ってか何でここにいるんだ？」

カノンノ

「私も一緒に行くんだってば。」

あゝそういえばアンジュさんがそんなことを言っていたな・・・

カノンノ

「なに？その不満そうな顔。」

カイト

「別に？」

アンジュ

「シンン！！いまからカイト君にはルパープ連山にカノンノといっ
てもらいます。」

咳払い下手！！

アンジュ

「カノンノはカイト君とガルーダを討伐、及び報告をしてね。」

カノンノ

「わかりました。」

おい。倒すこと前提かよ・・・

カノンノ

「行こう？カイト。」

カイト

「ん？ああ。」

アンジュ

「あら。忘れてたわ。これ一応渡しとくわ。アップルグミと、オレンジグミよ。3つずつ入ってるから。」

カイト

「へ？何でグミ？」

アンジュ

「これらのグミには、体力の回復と、術技を使う際に消耗するTPを回復させるのよ・・・そんなことも忘れたの？」

・・・知らなかった・・・いや忘れていた。グミにこんな力があるとは・・・

アンジュ

「それじゃあ行ってらっしゃい。」

カイト

「ああ。任せろ。」

ルパール連山

ルパール連山につくとすぐに魔物？らしきおたまじゃくしみたい
なやつ・・・『オタオタ』が4体(?)いた。

俺は背中にある、『柄は茶色の皮で巻かれていて、柄頭は小さな
赤い宝玉をそのまわりに白の金
属・・・オリハルコンが周りを覆っている。鰐は柄にむかって2つ
の対になるこれまた白い翼のよう
なものになっていて、真ん中には赤い宝玉がついている。刀身は一
切反りがなく、まっすぐで両刃、
これまた白く美しい剣』を構えた。

カイト

「戦闘開始だ！！カノンノ。後方支援を頼む。」

カノンノ

「うん任せて。」

カノンノが言い終わるのとほぼ同時に俺は駆けた。体が勝手に動
くような感覚だ。俺はやっぱり、記憶をなくす前はどこかで戦っ
てきたのだろうか・・・考えるより一瞬先に体が動く。

カイト

「ッハ！！」

横に一闪・・・オタオタの体を切り裂いた。

カイト

「魔神剣！！」

下から切り上げるのと同時に切っ先から衝撃波が飛んでいく。それはオタオタにぶつかり。オタオタは消えた。

カイト

「うし。次だ。」

カノンノ

「ライトニング!!」

俺が向かおうとしていた先にオタオタに雷が落ちた。すごい威力だったのだろう・・・オタオタはその一発で消えた。

カノンノ

「チェンジ!!」

カイト

「了解!!」

チェンジを合図に俺たちは前後衛入れ替わった。これはここに来る前に2人で決めたことだった。何かの合図でお互いに入れ替わり、戦闘の負担を軽減するというものだ。

カイト

「詠唱をする。フォローよろしく。」

カノンノ

「任せて。」

カノンノはオタオタX2へと向かっていき、大きな剣を振りまわ

した。

カノンノ

「獅子戦吼!!」

カノンノの右膝から青い獅子が飛ぶ。それは2対のオタオタにあり、地にひれ伏した。

カイト

「詠唱完了。下がれ!!」

カノンノ

「うん。」

カイト

「いくぞ・・・ヒヤド!!」

俺の唱えた術はオタオタの足元から氷が現れ攻撃。そして2体とも消えた。

カイト

「ナイス、カノンノ。初めてにしては息ぴったりだったな。」

カノンノ

「うん。でもあの氷何なの？見たことなかったんだけど・・・」

カイト

「んっわからん。とっととガルーダを・・・ってあれか？」

俺が指差した方向にはガルーダが4体いた。

カノンノ

「え？嘘・・・普段はガルーダ1体なのに・・・」

カイト

「へ？」

つまり俺だけこんだけってか？でも・

カイト

「いいじゃねーか。正直オタオタじゃあつまらなかったところだ。これぐらいがちょうどいいよ。」

カノンノ

「・・・うんわかった。いくよ。カイト！！」

カイト

「ああ。」

俺はもう一度背中から剣を取り出し。その場を駆けぬけた。

カイト

「虎牙破斬！！秋沙雨！！大地斬！！」

切り上げて切り下ろし、連続の突きで相手を怯ませ、上段からいっすきに斜め左下に振り下ろす。

すさまじい威力でガルーダは吹き飛んだ。

そしてガルーダの2体が俺のところに、もう1体はカノンノの方

にいった。

カイト

「守護方陣!!」

カノンノ

「虎牙破斬!! 虎牙連斬!!」

カイト

「魔神剣・双牙!!」

俺の守護方陣できた2体を撃墜、そしてカノンノが空中で2段切りをしたところにそのガルーダに向かって衝撃波を2発飛ばす。そのガルーダは塵となって消えた。

あと2体・・・なら・・・

カイト

「ラナリオン!!」

俺の唱えた術により、空に雷雲が覆う・・・

俺の意図に感づいたカノンノは詠唱を開始する。そして俺も詠唱を開始した。

ガルーダは残りの3体で固まっている。ここがチャンスだ・・・

カイト

「ライディン!!」

カノンノ

「ライトニング!!」

2つの雷が俺の剣に落ち雷を纏った・・・

ガルーダたちは突進してくる。その突進に合わせるように俺は剣を裏手に持ち替えた。

カイト

「ライディンストラッシュ(W)!!」

横に大きく伸びる雷を纏ったエネルギー波を放った。

それはガルーダを消滅させた。

カノンノ

「やったね。カイト。予定外だったけど。無事アドリビトムに入できるよ。」

カイト

「・・・い、い、・・・いやったぁー!!」

カノンノ

「おめでとう。」

カイト

「ありがとう。」

こうして無事、カイトはギルド『アドリビトム』に入れたのであつた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9968z/>

テイルズオブザワールド レディアントマイソロジー3 ～龍は閃光のように

2011年12月31日15時47分発行